Wondershare PDFelement

種をまく子供たち（小児ガンを体験した七人の物語）
　　ポプラ社　1，300 円　佐藤律子編

　闘病している子供たちは、世の中にたくさんの「種」をまきつづけています。元気の種、勇気の種、思いやりの種・・・・。そして、どの子供も野の花のように凛としています。その種がいつか芽ばえ、たくさんの人の心の中で育つことを願って、書名は「種まく子供たち」としました。　（編者の言葉より）

本より引用；
　残りの人生で、１８年分を感謝したい。今までは俺が生き残れるとか、俺がどうとか、自分のことばかりだった。けれどまわりの人がいてはじめて、自分が生きていけることに気付いた。それは治そうとすることも目的にあるのだけれど、それだけでないことを知って欲しいんだ。
　娘は、「少し休んだら、また、頑張るから・・・」といって旅立ちました。この言葉に、「私は負けたんじゃない」という娘の強い想いを感じています。「つらくても、苦しくても、それが生きているってことだよね・・・・」娘がよく口にした言葉です。
　はじめて病気の状況を知ったとき、僕は「翼をください」という歌を思い出しました。そして退院、家での生活がはじまりました。その時の僕には、絶望、あきらめ、憎しみしかありませんでした。・・・病院を出るたびに絶望が頭の上に降り積もっていくようでした。

　この本は３年Ｂ組金八先生で話題になったそうですが、私は知りませんでした。
東京医科歯科大で入院している小児の子供たちと遊ぶボランティアグループ「不思議なポケット」が開いた講演会の講師、石本浩市先生（順天堂大学で小児科担当後、現在は高知県であけぼの小児クリニック開業）の紹介で知りました。不思議なポケットでは小児医療の課題などを知った上で子供と遊ぶときの心構えとしても参考になるとのことで行ったようです。

　先生からは小児医療の課題、特に小児ガンのような医療においては、その治療だけでなく、小児でなくなった（１５歳以上）以降のケアの問題点を説明されました。
・　治療中のケア
・　治療終了後のケア
・　思春期のケア
・　成人になってからのケア

　小児ガンを克服しても、晩期障害としてその後色々な病気になったり、あるいは一病息災ではないですが、病気と一緒に過ごすことが必要だったり、ガン治療を受けたための後

Wondershare PDFelement

遺症との戦いがあったりと。

石本先生は、順天堂大で長期経過観察外来を平成１０年から開設され、
１．晩期障害への対応
２．心理社会的問題への支援
３．他科との円滑な連携
４．健康管理の教育

をされているそうです。せっかく病を克服しても煙草を吸ったり、また、引きこもったりと健康教育や、心のケアの重要性を強調されていました。

そして、心のケアでは、同じ仲間との連携も大切で、「がんの子供を守る会」から誕生した、Fellow　Tomorrow（フェロー・トゥモロー；小児ガンを体験したものが仲間作り、情報交換、社会への働きかけを行っている）の活動も、心のケアが大切だと説明されていました。気持がポジティブになると人生と対峙して生きていけると。石本先生と他２名の医師が一緒にその子供たちと合宿をしたりして心のケアも行っておられるとのことでした。

私は、小児ガンは治れば、後は特に問題はないと思っていたのですが、最近では７０～８０％は治る病気になってきているとのことで、なおさら克服した後の晩期障害や心のケアの重要性が増しているとのことを初めて知りました。

種をまく子供たちの本は、ガンを告知された子供が一生懸命考え、死と直面しながら、人生を考え、苦しい治療と戦い、そういった心の動揺・驚き・諦め・希望を書いています。大人でさえ、苦しい戦いだというのに。

多くのことを教えられるとともに、貴重な種を貰ったように感じました。どう育てるかは私に託されているのでしょう。種にｈｈｃの思いを降り注げば何か芽が出て花が咲くように思いました。また、生かされている自分ができることは何だろうかと、考えさせられました。

以上

Wondershare PDFelement